

伊藤 宇一 (イーストマン・コダック・ジャパン)

技術競争力の激化に伴い、民間企業を中心に基礎研究の重要性が認識されている。近年、基礎研究所を設立する企業が多いのはその一例といえる。技術の種を借りものでなく自ら生み出す努力を払うことで、技術力を高め、競争力をつけるとともに、ともすると研究開発の種を海外に求めてきた過去の経緯からの脱却を図りたい期待の現れといえるだろう。

一方、技術開発の面から見ると、エレクトロニクス、メカトロニクス、オプトエレクトロニクスなど、多くの分野で日本は技術の先駆的、先進的立場に立つまでに至っている。海外より技術を導入して、日本の市場に合わせるように修正していた — TECHNOLOGY IN — の時代から、先端的技術を世界に適用する — TECHNOLOGY OUT — の時代に移行しつつあるといえる。一方的な IN、一方的な OUT ではなく、INとOUTを注意深くバランスとすることで相互の技術発展に寄与する時代に入ったように思える。

コダックが、日本に研究開発センターを設立した目的は、日本市場の発展性と日本の技術開発力の発展性を高く評価したからにほかならない。

- (1) 市場と密接した拠点として研究開発センターを置き、市場の声を直接製品の設計に反映させる。 TECHNOLOGY IN
- (2) 学会への参加、研究者との交流を通じて、日本での科学技術の潮流を学び、競争力のある優れた技術力や技術開発力をコダックの製品に反映させる。

TECHNOLOGY OUT

INとOUTのバランスがコダックにとっても重要な課題となっている。

研究開発マネジメントの面でも、日本のスタイルは注目されている。

- (1) 顧客のニーズに合わせた製品開発； 時には、顧客と共同して製品計画をたてる。
- (2) 協調性： 販売－生産－研究開発にまたがる緊密な連携プレー、チームで研究開発を行う努力。
- (3) NIH (Not Invented Here) にこだわらず、他で開発された技術を積極的に取り入れていく努力。

などがよく指摘されている。これらは、社会的背景、環境によって長年に渡って育てられたものもあり、文化の違いを越えてIN/OUTしにくい問題を含んでいるが、注意深く理解してバランスをとることで、マネジメントの面でもグローバルに刺激し合うことが期待できる。